大地

第　27　号
1999.1.25.発行
浄　國　寺
☎0255-23-5724

俳句五句

山崎　睦

老斑も　生きし証(あかし)や　枇杷(びわ)の花

正し見る　八十路の姿　初鏡

長寿とも　達者とも言ひ　去年今年(こぞことし)

松の内　明けて落着く　寺の庫裡

床の花　乱れ始めて　女(め)正月

新年おめでとうございます

お寺の一年は、元旦の修正会から始まります。

年末にお華を立て、打敷を飾り、お鏡餅で荘厳を整え、午前六時に「正信偈」を読誦します。（時間はお寺によって異なる）

九時を大分過ぎた頃から、門徒（檀家）の人達が次々に年始に来て下さいます。

この日は年に一度だけ昔ながらの塗のお膳で、皆さんをおもてなしすることにしています。お膳は、土橋の風間さんから「蔵をこわすから」と頂戴した内朱の物、長年使い痛みがひどくなったお膳に変わり三年程になります。

御馳走といっても飽食気味の昨今では、ごくささやかなものですが、顔を合わせた人同士が和やかに語りながら一杯を傾けます。以前はそんな場から縁組が生まれたこともありました。

年の初めに、手次ぎの寺にでかけ、ご本尊におまいりする。面倒でも、今年おいでにならなかった方も、来年からは是非お出かけ下さい。

浄國寺同朋会のこと

平成八年六月に、北城町の金井さんの一言から、「正信偈」を練習しようと、同朋会が生まれました。以来、毎月第二日曜の朝七時になると十二～三人の人が集まります。

講師には三和村の若い僧侶、保倉謙雄さんをお願いし、保倉さんの人柄もあって、とても良い雰囲気の中、一時間ほどが瞬く間に過ぎてしまいます。

「正信偈」の練習の後は、皆さんでお茶を飲みながら、ある時は法話を聴き、あるいは雑談、はたまたミニ座談会のような展開になったりと、時に応じての気張らずの会です。

そして参加する人達の楽しみの一つは、保倉さんの吹いてくれるオカリナの音色。

昨年の秋には、保倉さんお寺で催された「オカリナとギターと語りの会」にも三台の車で出かけました。

どなたでもどうぞおい出下さい。

二月の会は、二月十四日十一時より、新年会を兼ねて軽いお斎をはさんで行います。

忘れていること

北城町一　金井信一

「海上に浮上し、ハッチを開け艦上に出て思いっきり空気を吸ったときの、その旨いことといったら例えようがない」

この話は、私が昭和二十三年七月にソ連から復員し、海軍で潜水艦に乗務しておられた叔父さんを尋ねた時に聞いたものです。潜水中の艦内の空気は作られたものなので、浮上して吸う酸素たっぷりの空気の味は格別だと思います。

私たち人間は、生まれて以来息を引き取るまで、空気なしでは生きられず休みなく呼吸をしていながら、私自身空気の有り難みを感ずることはありません。このように私達が生活していくの上で恩恵を受けていながら、当たり前のように思っていることが幾つかあると思います。

自動車のない生活は考えられませんが、肝心なガソリンはスタンドに行けば何時でも入れることができ、あることが当たり前で限りある資源ということは殆ど忘れられています。環境を守るのにアイドリングを止めようとは言われるが、ガソリンの節約とは言われません。

また片時も無くてはいられない電気についても、原子力発電については神経を尖らせますが、スイッチを入れれば点灯し、プラグを差し込めば便利な電気器具が何不自由なく使える電気のあることが当たり前でありますし、ガスについても同じく、改まって有り難いと思うことは有りません。

大事なことは、私達人間が生きていくのに如何に多くの命を頂いて生かされているかということと思います。

口に入るものの大部分、その食物の命を頂いているのですが、スーパー等で買う時には既に食物になっていて、それが命あったものなんてあまり考えません。これほど有り難いものであるのに、有ることが当たり前で、賞味期限とかに拘って捨てられるものが沢山あるなんて実に勿体無いことと思います。

こういう私も春になって山菜を採りに行くと、蕨や薇、独活等を、人間の為に採ってくれといって出てきた如く勝手に思い込み、いや特にこのような思いもせず目を皿のようにして採り、命を奪っているなど全然考えもせずに収穫を喜ぶだけで感謝を忘れていました。

私は去る八月肺腫瘍の手術をしたのですが、其の際、迷走神経のうち声帯に達しているのが損傷を受け、声が思うようにならず特に高音が出なく、歌は勿論読経ができなくなりました。朝目覚めて家内に第一声をかけ、あゝ今日も声が出るなと思う毎日ですが、会話ができることに感謝しています。

当たり前のことが当たり前でなくなってからでなく、当たり前の時に感謝ができなかったことを反省しています。

※　金井信一さんは北城町一丁目に在住長い会社勤めを定年退職の後、新たな仕事を得て、悠々自適の生活です。
一面にも紹介した浄國寺同朋会は、金井さんの一言なくしては生まれることがなかったかもしれません。
昨年、思いがけず病を得る身となられましたが、そのような中からお寺にもよく通って下さり、またこの度は無理な原稿のお願いにも応じて下さいました。

「人前結婚」体験記

山崎隆昌

若い友人M君の仲人を行った。他人の話では仲人というものは大変らしい。しかし僕らの場合、仲人らしきことは全く何もしなかったと言ってよい。M君が美しい婚約者と二人で相談しながら、全て整えてくれていたから。

ところで、僕らが仲人を引き受ける時、えらそうにも次のように二人にお願いした。

僕らは、それなりに仏教に御縁を頂いているものである。だからといってM君ら二人に結婚式は仏式で行えとは言わないけれども、神式やキリスト教式はなるべく御免こうむりたいと。

結果として二人が決めた結婚式は「人前結婚式」。要するに、参加者全員が署名し、結婚の立ち会い者になる。M君ら二人はその人々に〃結婚〃を誓い署名を行うのである。二人は自らの気持ちや考えを率直に語り、聞く方は清々しいものを二人に感じた。

仲人の役割は最後に一言となる。その一言を「結婚認め宣言」と言うそうだが、冗談じゃない認めるも認めないも今更ないだろうにと思いながら、僕が話したことは以下の通り。

『古代ギリシャの詩人ソポクレスは「不思議なるもの数ある中で、人間ほど不思議なものはない」と述べています。

今ここに、不思議な縁によりM君とHさんが、本日より長い人生をともに歩むことを人々の前で誓われ確認されました。そして私たちは、この誓いの言葉を、少しの興奮と大きな歓びとともに聞くことが出来ました。

このことは、今後末長く二人が互いに協力してより豊かな生活を築くことへの誓いであります。それと同時にご両親をはじめ、二人に繋がる全ての人々への感謝の誓いでもあります。

この誓いが、いつまでも二人の中に深く深く刻み続けられることを願って立合者の言葉とします。』

極度の緊張に目がくらみ、声はかすれ、足はガタガタで小心者の自分に、今更ながら呆れしまった。初めて経験する「人前結婚式」は、とても良い結婚式だったと思う。

結婚式と宗教との関わりは、シャーマン的な原始宗教を含めると随分古くから続くものであろう。

そして結婚はその宗教を信仰する人々にとって、信仰する宗教との関わり無しに考えられないであろうし、とても厳粛で意義の深いものと思う。

ところで独断的な物言いをすれば、現在様々な形で行われている結婚式において、神道式、仏教式、キリスト教式のいずれの形にせよ多くの場合、それの持つ宗教性とは関係なく、自己満足的なセレモニーとして行われている。式の主祭者も、結婚者の信仰はあまり問わないこととする。

結婚という人生における大きな行事を人的なものを超えた偉大な存在に託したい気持ちは解らなくはない。しかしそこに何か空しさや、淋しさを感ずるのは僕だけであろうか。

「人前結婚」は貴重な体験であった。そしてこれから相談された場合「人前結婚が良いですよ」と言おうかなと思っている次第。

そして仲人体験もよい思い出。何しろ僕らの場合、仲人らしきことは全くせずに、時の流れを楽しんでいたので したから。

和顔愛語

山崎慎子

しあわせなシワ

銀行の自動支払機を利用している時何げなく顔をあげると、そこに鏡があった。鏡の中の私は五十歳の顔をしていた。といっても五十歳の顔がどんなものか、そんな基準を知っているわけでもないし、自分なりのイメージがあるのでもない。私が改めて自分の年齢を確認させられたのは、目の下にクッキリと刻まれた一本のシワのせいである。

負け惜しみではない（つもりだ）が、ガッカリしたり落ち込んだのではない。あゝ年齢相応になっていっているのだナァという、ごく自然な納得の仕方を軽い感慨と共にしただけのことだ。

その夜、用があって娘の部屋に入った時、狭い部屋には不似合いな大きな鏡台の前でそのことを思い出した。

「ねぇ　見て見て、ここにこんなクッキリしたシワが出来てるんだよ。今日銀行の鏡で発見しちゃった」

「へぇー　どれどれ。ほんとうだ。でもよかったね」

「ん？」

「いゝシワじゃない。笑いジワだもの。いいシワですヨー」

私は自分自身が必要以上に驚いたりガッカリしなかったことにも無意識のうちに安堵していたのだが、娘のひとことは殊の外嬉しかった。

夏の想いで

久しぶりに自転車を走らせ、公園を通りかかった時、黄色の虫籠を下げた小さな女の子に呼び止められた。

「ねえ　セミがはいってゆの。ようたんがちゅかまえてくえたの」

「ほんと　三つも入っているのねえ」

「バッタもはいってゆんだよー」

「バッタもようちゃんがつかまえてくれたの？」

「うん　そう。あたちネ　こんだけ」

そう言いながら女の子は指を三本つき出す。

「そう　三才なの」

「おばちゃんはいくちゅなの？」

「おばちゃんね　百才位なのよ」

「ふーん　ようたんはね　こんだけ」

と二本の指を出す。

「あなたのお家はどこなの？」

「んーとね　うえなの。ようたんちはしたなの。ようたんちはおかねもちなの」

近くには公務員官舎が何棟か建っているのでそこの住人なのだろう。

「もうお昼だから、お母さんが待っているかも知れないね」

「うん。おばちゃんはどこゆくの？」

「あのね　おうちへかえるのよ」

「あちたも　また　きてねー」

「うん。明日もね。バイバイ」

「バイバーイ」

「もうひとちゅ　ちゅかまえたおー」

ようちゃんと思しい男の子が白いたもの先を真剣な顔で押さえながら近づいてくる。花の終わった蓮の大きな葉が初秋の風に揺れている。

ほわほわと明るく温いものが心の中に満ちて来る道

後記

大地二十七号をお届けします。二十世紀最後の年を迎えましたが皆様はどんなお正月を過ごされたでしょうか。新しい年がそれぞれ稔り多い年となりますように（慎）